

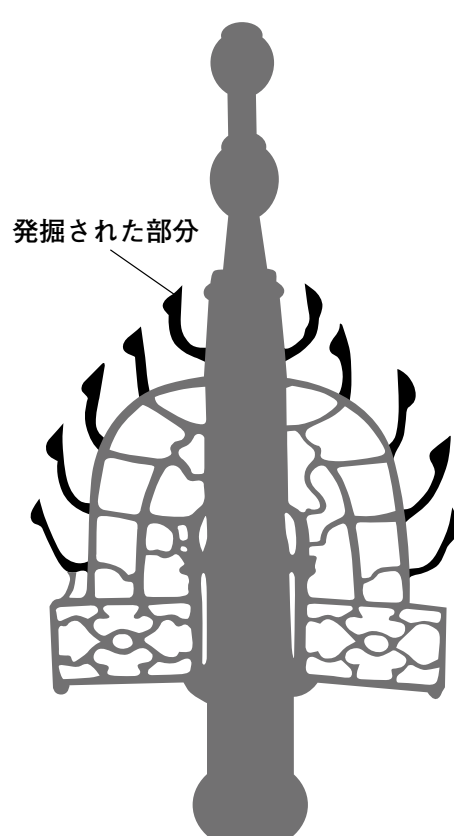
### 1 突き刺さった水煙すいえん

それは奇妙な出土状況であった。一九九九年五月二八日金曜日晴れ、尾張元興寺跡おわりがんこうじあと第七次発掘調査No.17土坑を掘削中、棒状の青銅製品が顔をのぞかせた。通常土坑内に埋まった土を掘りあげれば、遺物も取り出すことができるのであるが、その青銅製品は浅い土坑の底を突き抜けて、地山じやまと呼ばれる自然土に深く食い込んでいたのである。しかも二本。その地面に打ち込んだかのような出土状況（資料1）は、一瞬「現代建築物の避雷針アースかな？」との疑念をも懐かせたが、慎重に調査を進めて現れたものは、五重塔最上部に光り輝く「水煙」（注1）の端部であった（資料2）。地中深くに突き刺さった一見不可思議な出土状況も、五重塔最上位という高所から転落したための結果であり、その衝撃を地中に記録していたとも言えよう。そしてなによりも重要なことは、この発見により、近くにかつては荘厳な五重塔が建っていたことが推定できるようになったのである（資料3、資料3の参考図）。

（資料1） 水煙の出土状況  
（見晴台考古資料館蔵 杉浦秀昭撮影）

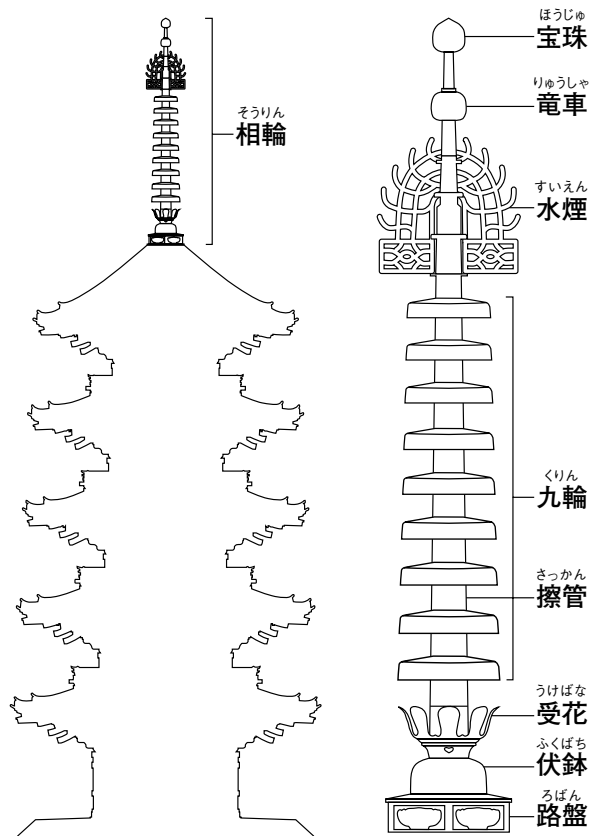


（資料2） クリーニングされ輝きが戻った水煙  
（見晴台考古資料館蔵 杉浦秀昭撮影）



（資料3） 復元された水煙  
今回出土の部位と同じ形の類例は知られないが、唐草をデザインした水煙端部と推定した。現状では長さ32センチ、厚さも1～2センチあり、水煙とすれば相輪全体はおおよそ2メートルに復元できる。その立派な水煙から、高さ30メートル以上の五重の塔を推定することができる。

（注1） 水煙は、仏塔最上部の相輪（そうりん）の一部。相輪は露盤（ろばん）・伏鉢（ふくばち）・請花（うけばな）・九輪（くりん）・水煙・龍車（りゅうしゃ）・宝珠（ほうじゆ）からなる（資料3の参考図）。造寺の際の特注品と思われ、飛鳥寺造営の際には百濟から「露盤博士」と呼ばれた金工技術者が渡来し製作した。



（資料3の参考図） 五重塔の略図

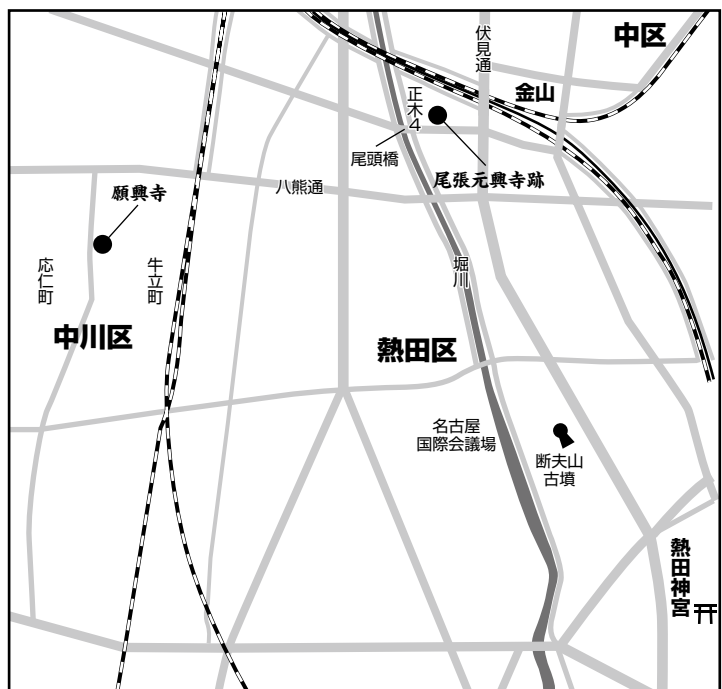
### 2 「願興寺」「元興寺」「尾張元興寺跡」

ところで、「尾張元興寺跡」とは現在の遺跡名であり、尾張元興寺という名の寺院は現在過去ともに存在しない。また、これまでの発掘調査では寺院名にかかわる墨書土器や木簡等の遺物も出土していないため、考古学的に創建当初の寺院名を推定する手立てはない。

現在、当寺院跡周辺に建てられているお寺には「元興寺」と「泰雲寺」がある。しかし、「泰雲寺」は、寛文九年（一六六九）、立田村から移転された瑞光山大応寺が後に泰雲寺となったものであり、「元興寺」は享保三年（一七二八）に知恩院の末寺国豊山元興寺として建て

られたもので、どちらも旧寺院の跡地に江戸時代に再建されたお寺である。一方、当地から一・五キロ、南西の中川区牛立町には、当地から戦国期に移転したとの沿革をもつ「願興寺」が位置する(資料4)。

『日本紀略』(注2)元慶八年(八八四年)八月二六日甲寅の条には「勅令して尾張国愛智郡定額願興寺を国分金光明寺となす。本金光明寺災火烧損縁なり」とあり、九世紀後半、愛智郡には焼失した国分寺の機能を託された定額(注3)「願興寺」があったことがわかる。ここに登場する「願興寺」が「尾張元興寺跡」にあたるであろうことは、当寺院址が九世紀後半頃に存続していたことが発掘調査(資料5)の成果から明らかであること、現在の願興寺が上記のようこの地から移転した伝聞をもつこと、さらに他に有力な候補になる寺院・寺院址もないことからまず間違いない。従って当寺院址は、少なくとも九世紀後半には「願興寺」と呼ばれており、中世の段階で牛立村に移転。そしてその



(資料4) 尾張元興寺跡と願興寺の位置図

あることは、当寺院址が九世紀後半頃に存続していたことが発掘調査(資料5)の成果から明らかであること、現在の願興寺が上記のようこの地から移転した伝聞をもつこと、さらに他に有力な候補になる寺院・寺院址もないことからまず間違いない。従って当寺院址は、少なくとも九世紀後半には「願興寺」と呼ばれており、中世の段階で牛立村に移転。そしてその

(注2) 神代から後一条天皇までの史実を略記した史書。神武天皇より光孝天皇までは六国史から抄略する。元慶八年の記事は光孝天皇朝であり、六国史『日本三代実録』の欠落部分である。

(注3) 定額寺とは朝廷が保護した準官寺のこと。多くは有力氏族の建立で、官寺待遇を求めたものが多かったために制定された。



(資料5) 尾張元興寺跡の発掘調査風景  
(見晴台考古資料館蔵 筆者撮影)

後、跡地に元興寺が建てられたと整理することができよう。本稿では、遺跡名として「尾張元興寺跡」を、寺院名としては「願興寺」を使用する。

### 3 寺域と伽藍配置

さて、江戸時代には、移転前の願興寺が古刹であり、往時はかなりの大寺であったであろうことはまだ知られていたようであるが、周辺が住宅地・商業地として開発されるにしたがい、人々の記憶から忘れ去られてしまう。学術的な現地調査は、昭和初期の石田茂作(注4)が初めてであるが、「土壇・礎石の残っているのは一つも無い」と記述され、当時すでに伽藍の痕跡を地上からうかがうことはできなかつたようである。現在では「まぼろし」となってしまった古代寺院願興寺の解明は、今後の発掘調査成果に委ねられているといってもよいであろう。その発掘調査は一九五二年(昭和二十七年)に始まるが、本格的には一九八〇年代になってからであり、一九八〇年代五回、一九九〇年代四回、二〇〇〇年代七回を数える。しかし、小規模な調査が多いこともあり、残念ながら具体的な伽藍にかかわる痕跡ははまだ発見されていない。一九九九年の水

(注4) 仏教考古学者(1894~1977)。奈良国立博物館館長など歴任。雅号を瓦礫洞人(がれきどうじん)と称した。石田茂作の願興寺の調査は、歴史地理・考古学・文献と総合的に検討され、①元興寺と泰雲寺の両所有地域を往時の寺域と推定。②飛鳥時代末期の建立で、平安(藤原)時代まで隆盛。③土地に伝わっていた「道場法師建立説」を紹介し、あわせて創建時の周辺の環境を推定した。

煙の発見が、近くに塔の存在を具体化した唯一の発見と言っても過言ではない。ただ、発掘調査で大量に見つかる古代瓦の出土状況は、やはり現在の泰雲寺と元興寺の周辺が中心伽藍である可能性を傍証するものである。

したがって、寺の範囲や伽藍の配置については、江戸時代の泰雲寺と元興寺が、願興寺の中心伽藍跡地に建立されたとの前提のうえで、可能性を推定することとどまる。資料6(次ページ)は、明治一七年(一八八四)当時の泰雲寺と元興寺の場所に、水煙が出土した地点を示した。

ここから読み取れる可能性をまとめれば、  
①泰雲寺所有地の西側は台地崖面であり、台地の最西端に立地する。古代にあつては、まさに海(干潟)に面して建立された寺といえよう。

②中心伽藍規模を東西約一〇〇メートル・南北約六〇メートルと推定することができ、伽藍配置は塔・金堂が横に並び、タイプの可能性が高くなる。その規模は法隆寺西院伽藍と同程度となる。

③水煙は推定中心伽藍の東よりからの出土であり、塔が東、金堂が西に並び、法起寺式の可能性が考えられる。

約五〇年、名古屋(東海地方)で初めての瓦屋根の建物がこの願興寺となるのである。

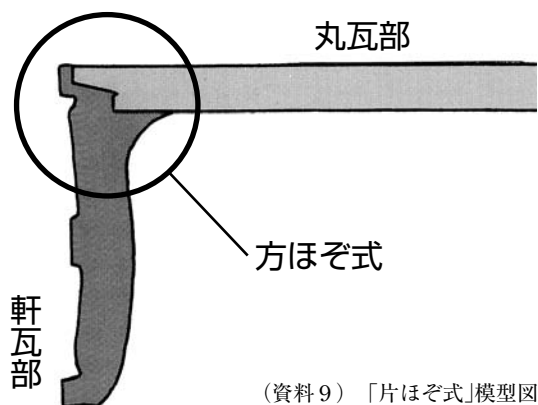
願興寺最古の軒瓦は、蓮華紋軒丸瓦と重弧紋軒平瓦の組み合わせ(資料8)である。うち、蓮華紋軒丸瓦(直径約一八センチ)は、

- ①周縁部は無紋(素縁)。
- ②八弁の端正な無子葉花弁(素弁)。花弁は肉薄で、弁先は尖ってわずかに反る。
- ③間弁は「T」字状で細く、中房につながる。
- ④中房は低い半球状という構成であり、畿内のいわゆる「奥山久米寺式」や「船橋廃寺式」と呼ばれる瓦と同型式である。

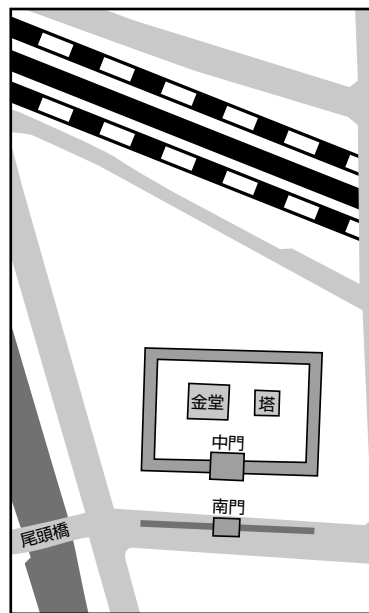
「奥山久米寺式」「船橋廃寺式」軒丸瓦は、七世紀前の中頃の百済系瓦で、飛鳥の奥山久米寺・斑鳩の法輪寺・河内の西琳寺・船橋廃寺などから出土がある。畿内外での出土はたいへんに珍しく、東国では唯一の出土でもある。また、製作技法的にも、丸瓦端部の凹面側を段にカットして瓦当部と接合する「片ほぞ式」という技法が観察でき(資料9)、この接合技法もまた、畿内の七世紀中頃までの百済系瓦に見られる特徴である。これら文様・技法の特徴から、願興寺の蓮華紋軒丸瓦は、飛鳥寺を造営した百済渡来工人直系の手による製作



(資料8) 蓮華紋軒丸瓦(右)と重弧紋軒平瓦(左)  
(ともに見晴台考古資料館蔵 筆者撮影)



(資料9) 「片ほぞ式」模型図



(資料7) 伽藍想定図



(資料6) 泰雲寺と元興寺、出土した水煙の位置関係  
明治17年の地籍図(『愛知県名古屋区地籍全図(復刻版)』よりトレース)の泰雲寺と元興寺の所有地に、水煙の出土地点を示した。

④泰雲寺・元興寺の所有地南側は佐屋街道に面しているが、南門を推定するにふさわしい。ちょうど海路から陸路への玄関口に南門が位置することとなる。以上の想定をまとめたのが、資料7であるが、あくまでも仮説であり、今後の発掘調査での検証が必要であることはあらためて述べるまでもない。

#### 4 瓦から知る願興寺の創建年代

これまでの発掘調査では、伽藍の遺構ははっきりしないものの、古代寺院にかかわる遺物は多数発見されている。これらの出土品を検討することによって、願興寺の創建から衰退までをイメージすることができ、特に創建時の様子は、古代瓦の検討がひじょうに有効である。我が国最初の本格的寺院は、五八八年に建設着手される飛鳥寺であるが、造営にあたっては百済から僧・寺工・画工・露盤博士(金工技術者)らとともに「瓦博士(瓦制作技術者)」が渡来し、ここに初めて瓦も造られることとなる。飛鳥寺の伽藍は、我が国最初の瓦屋根建物とも言えるのである。高層で壮大な光り輝く瓦建物群を初めて目の当たりにした人々は、さぞかし驚いたことであろう。その飛鳥寺に遅れること

と言えよう(資料10)。そしてこの瓦の年代観である七世紀中頃に願興寺(尾張元興寺跡)の創建年代と想定しているのである。

### 5 工人たちの招来

最古の瓦と同じ「片ほぞ式」技法が観察できる瓦に、弁内にパルメット文(注5)を配す蓮華紋軒丸瓦がある(資料11)。願興寺出土の瓦の中でも最も美しいデザイン  
の瓦でもある。秀麗な文様の瓦だけに好事家に注目されたのも古く、江戸時代の中頃には尾張名古屋の趣味人、瓦礫舎がれきしやによって、河内国野中寺かわのくにのちゅうじ(大阪府羽曳野市)の瓦と同製であることまで指摘されている(注6、資料12)。同じ範型(注7)を使って作られている瓦を同範瓦と呼んでいるが、願興寺の瓦と野中寺の瓦はまさに同範瓦である。同範瓦は表面に残るキズなどを細かく観察  
することで、さらに同範瓦同士の前関係も知ることも  
ができるが、当パルメット文軒丸瓦の場合、野中寺で  
使用した範を加工して願興寺の瓦を製作したことが  
明らかであった。文様・製作技術の共通に加え同範で  
あることも確認できたことは、畿内で製作した瓦をこ  
の地にまで運んだ可能性も出てくるが、やはり、瓦の

(注5) 唐草文様の一種。もとは  
棗椰子の葉を図案化したもの。

(注6) 瓦礫舎の本名は朴厳祖淳(はくげんそ  
じゆん)。寛政期(18世紀後半)に活躍した桜天  
神社霊岳院の住僧。瓦を収集し「古瓦譜」という  
拓本集にまとめた。その瓦の拓本集には願興寺  
の瓦が6点所収されているが、うち、パルメッ  
ト文軒丸瓦には、「河内国野中村野中寺ト同製」  
との考証が書き添えられており驚く。

(注7) 範型とは、同じ文様のものを  
多量に製作するために用意された「型」  
(反転文様)のこと。主に木の「型」が多  
く、この場合長期間使用する間にキズ  
が進んだり、彫りなおしと呼ばれる加  
工を加えることもある。



(資料10) 願興寺最古の軒瓦(右)と畿内・船橋廃寺出土の同型瓦(左)  
(右)見晴台考古資料館蔵 筆者撮影  
(左)弥生文化博物館蔵 片山彰一撮影 「河内古代巡礼」近つ飛鳥博物館より転載



(資料11) パルメット文軒丸瓦  
尾張元興寺跡出土。直径約20センチ。古代の瓦は黒い色に焼き上が  
ることを志向して製作されたものの、結果的には窯での焼きムラ等  
により、黒・灰・白・茶・黄橙などさまざまな色に焼きあがった。古代  
寺院の屋根はまだら模様であったといえよう。その雰囲気は、現在  
の奈良市元興寺極楽坊屋根に見ることができる。  
(見晴台考古資料館蔵 筆者撮影)

(資料12) 願興寺蓮華紋軒丸瓦の拓本(右)と河内国  
野中寺の瓦(左)  
江戸中期すでに、願興寺の丸瓦と畿内、河内国の野中寺の瓦が  
同製であると調査されていた。  
(右)「名古屋市博物館調査研究報告Ⅱ『瓦礫舎』」名古屋市博物  
館より転載  
(左)羽曳野市教育委員会蔵 片山彰一撮影 「河内古代巡礼」  
近つ飛鳥博物館より転載



尾張国尾頭  
願興寺  
河内国野中村野中  
寺ト同製

範型を携えた畿内の瓦工人が、この地で畿内とそつくりな瓦を作ったと考えた方が無理がない。  
そして、それは瓦工に限ったことではなく、土木工、  
寺大工、壁大工、石工、鍛冶工、画工、仏師等々、当時の  
最先端の技術を持った者が仏僧とともに大挙この地  
に集い、その粋を集めて願興寺造営にかかわったであ  
ろうことを類推させる。つまり、飛鳥寺の造営が百済  
からの工人の渡来により成しえたのと同様に、願興寺  
造営には、都のある近畿地方の多くの工人の招来によ  
り初めて成し遂げられたのである。

## 6 尾張氏の氏寺

では、願興寺の創建者は誰なのであろう？ 願興寺は魚年市瀉あゆちがたに面し、畿内と尾張を結ぶ海上交通の要衝に立地する。そして、南には、東海一の前方後円墳「断夫山古墳」資料13と、天叢雲剣あまのむくもつるぎ（草薙剣）を祀る神体とする「熱田社」資料14が位置する。となれば、当然、魚年市瀉（愛智郡）を本拠とし、草薙剣を熱田社に奉納した豪族、尾張氏注8が氏寺として創建したと考えるのが至極真つ当であろう。尾張氏は五世紀から六世紀頃、大和朝廷より国造に任ぜられ勢力を伸ばした豪族で、とくに尾張連草香の娘目子媛めこひめが継体天皇の妃となつて安閑・宣化天皇を生むと朝廷内でも力を持ったとされている。古代にあつても、尾張八郡中五郡の郡司にその名がみえ、この地域では依然勢力を保つていたことがうかがわれる。この点も、願興寺の創建が尾張氏であつた可能性を後押しする。

しかし、それにしても、中央豪族が競つて寺院建立をおこなつていた七世紀中頃という時期に、多くの僧や工人を中央から招聘し、中央豪族に負けず劣らず立派な寺院を建立した事実には驚かざるを得ない。その要因はさらに考える必要がある。

## 7 道場法師創建説

ところで、地元では、願興寺創建は「道場法師」とする説が江戸時代以来圧倒的である。道場法師とは『日本霊異記』注9の説話に登場する強力ちからの僧で、奈良の元興寺（飛鳥寺＝法興寺）での活躍が物語られる。説話は以下の四つの段落に大きく分けられている。

- ①敏達天皇の御世。尾張国阿育知郡片葩里あいちけんかたのぼり注10の農夫が、天から落ちてきた雷を助けたお礼に子供を授かる注11。
- ②その子供が十余歳になつて、朝廷の強力の人と力比べをするために都に出る。そして大石の投げ合いの力比べに勝つ。
- ③元興寺の童子となり、鐘堂に出た鬼を退治する。
- ④優婆塞うぱそく（出家前の在家の仏教信者）となり、元興寺の田に水を引く。そして、それを妨げる諸王と水争いになるが、巨大な石で水門を塞ぐことで決着をつける。その後、出家して僧になり道場法師と名乗る。

説話はここで終わり、その後尾張で寺院を創建したとの記載はない。では、なぜ地元の人々が願興寺創建を道場法師とするかといえば、道場法師の出身地「尾張国阿育知郡片葩里」が願興寺周辺と考えられること

注8 尾張氏は、尾張国魚年市瀉（愛智郡）を本拠とした豪族で、天火明命（あめのほあかりのみこと）を祖神とする伝承をもつ。



（資料13）断夫山古墳（筆者撮影）



（資料14）熱田社（筆者撮影）

注9 『日本霊異記』は平安時代（弘仁13年[822]頃成立）の仏教説話集。道場法師の説話は上巻第3「電（いかづち）のむがしびを得て生まれし子の強き力ある縁（えに）」に見ることができる。

注10 尾張国阿育知郡片葩里は、中区古渡町とする説が有力。とすれば、願興寺周辺の伊勢山中学校遺跡・正木町遺跡・金山北遺跡などの遺跡が、片葩里にあたる可能性が高い。実際にもこれらの遺跡からは古墳時代から古代の住居跡がみつまっている。

注11 この子供が生まれた時、子供の頭に蛇が二重に巻きつき、首と尾が後に垂れて生まれる。とあり、元興寺周辺の地名「尾頭」はここからきたという説も地元に残る。

注12 和田萃「飛鳥川の堰」『日本史研究130』1973。なお、この水路の先には、尾張元興寺・正木町遺跡と共通の文字資料が出土した石神遺跡が位置し、興味深い。

と、別の説話で道場法師の孫娘が尾張や美濃の国で活躍することによるのであろう。すなわち「道場法師は里帰りした。そして故郷で願興寺を建立し、この地で子孫を残した」となるのである。

## 8 説話の信憑性と願興寺創建

「道場法師」説話のうち、四つ目の「水争い」の段について、和田萃が重要な論考を発表している注12。和田は飛鳥川の傍らに残る弥勒石を、飛鳥川に造られた「木葉堰」とそこから枝分れた人口水路に関連する施設の一部と推定し、また地籍図にも「木ノ葉」「道場」の小字名も見られることから、道場法師の水争いの説話にみえる水門と大石がまさにこれにあたるとした。そして「木葉堰」設置の時期についても、「七世紀後半には既に存在しており、七世紀前半まで遡らせうるかもしれない」と述べた。説話が史実をもとにして作られた可能性を示したのである。

すなわち、飛鳥寺の建立やその周辺の開発に、尾張からの出身者が活躍した可能性もまた十分に考えられるのである。では、この道場法師が願興寺創建にかかわった可能性はどうなのだろうか。

説話を歴史年表に照らしあわせてみたのが(資料15)である。敏達天皇の頃の生まれを五七五(五八〇年、上京の「十余歳」を一五歳、「水争い」を和田説の七世紀前半頃と仮定した。おおよそ、飛鳥寺建設中に上京し、飛鳥寺完成後童子から優婆塞となり、大化の改新前には出家して「道場法師」になっていたと想定できようか。そして、出家した「道場法師」が、尾張へ帰ってきたとすれば、願興寺の考古学的な創建年代である七世紀中頃ともうまく連動させることが可能であり、齟齬(そご)をきたすことはない。

年 表		道場法師説話	仮定の歳と年代	
572~585	敏達天皇の頃	①誕生	0歳	575~585
588	飛鳥寺建立開始			
594	仏教興隆の詔	②上京(力比べ)	15歳	590
596	飛鳥寺ほぼ完成	③元興寺童子(鬼退治)	35歳	~620
622	聖徳太子死去	④元興寺優婆塞(水争い) 出家「道場法師」	45歳	620~630
645	大化の改新			
650	願興寺創建			

(資料15) 道場法師の説話と年表(筆者作成)

寺(元興寺)の建立は、百済から最先端の技術を携えた工人の渡来によって成し遂げられたものであったが、「道場法師」はこれらの人々より技術を伝授されたであろうことは年表からも想像できる。願興寺の蓮華紋軒丸瓦は、飛鳥寺を造営した百済渡来工人の直系の手による製作と前述したが、「道場法師」はまさに百済渡来工人直系の技術者だったのでないだろうか。さらには、人より秀でた優秀な習得力や行動力をもっていたことで、その後の出世や活躍に繋がったとも想像でき、七世紀中頃には僧「道場法師」として、飛鳥寺内でも相当な実力者になっていたであろう。「道場法師」の実在性や、尾張への帰郷の具体性はやはり不明と言わざるを得ないが、願興寺が東国で最も早く僧や工人を招聘することのできたことを、尾張からの出身者で都の大事で実力者となっていた人物のサポートがあったと考えれば、非常に良く理解できるのである。

願興寺創建の物語を簡単にまとめておこう。五九四年の仏教興隆の詔、五九六年の飛鳥寺(元興寺)完成以後、各氏の寺造りが盛んになる。当地の豪族尾張氏も氏寺建立を計画する。その時、飛鳥寺の建立や周辺開墾で活躍し、高僧となっていた尾張の出身者(尾張氏の子弟かも)のサポートを得て、多くの僧や工人を畿内から招聘する。一族の聖域(断夫山・熱田社)と集落との間に氏寺を六五〇年頃建立する。これが願興寺と考えておきたい。

## 9 願興寺の終焉

願興寺は九世紀後半頃、国分寺の機能を託された定額寺であったが、その後の文献史料にはまったく登場しない。発掘資料も一〇世紀以降の遺物が激減することから急速に衰えていったと推定される。律令制下での寺院制度崩壊の波に、尾張も一気に呑み込まれたようである。

一九九九年に突き刺さって発見された二点の水煙片は青銅(銅とスズの合金)に金メッキを施した金銅製であったが、化学分析の結果、二点は別々に製造されたものであると分かった。水煙は四枚が一組となり、擦管さろかんと呼ばれる軸に繋がれるが、この分析結果は二枚以上が同時に転落していたことを明らかにした。水煙が二枚以上同時に擦管から外れて落下するとは考えがたく、むしろ五重塔自体が倒壊したことを連想させる(注13)。その時期は遺構の切り合い関係から古代末頃(平安時代終わり頃)の寺院衰退期であることは確実

(注13) 塔が倒壊したのであれば、相輪の他の部分などもっと多くの金属製品が見つかって良さそうであるが、見つからない。実は、他の遺跡の発掘調査でも、金属製品はあまり発見されない。これは、多くの金属がこまめにリサイクルされた結果である。発見された水煙は、地面深くに突き刺さったことにより、リサイクル目的の回収者の目から逃れたものともいえよう。

であり、この水煙片が突き刺さった時期こそが、この地に法灯をつないでいた古代寺院の実質的な終焉と考えられよう。古刹の巨大な五重塔が地響きをたてて倒壊したシーンは、律令時代崩壊の具体的な姿としてきつと人々の臉に焼きついたことであろう。

(はっとりてつや・NPO法人古代瀬波の里文化遺産ネットワーク理事)

## 参考文献

- |                  |           |
|------------------|-----------|
| 書名               | 著者・編者・発行所 |
| 飛鳥時代寺院址の研究       | 石田茂作      |
| 野中寺 塔跡発掘調査報告書    | 羽曳野市教育委員会 |
| 尾張元興寺跡第7次発掘調査報告書 | 名古屋市教育委員会 |
| 名古屋市教育委員会        | 名古屋市教育委員会 |